様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３５０９３０

研究課題名（和文）幼児を持つ親の子どもに対する愛情表出行動と子どもの感情安定性に関する行動学的研究

研究課題名（英文）Behavioral Study on Mothers' Expressing Affections for Children and Children's Emotional Regulation

研究代表者
今川　真治（Imakawa, Shinji）

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：００２１１７５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，幼児の母親が日常生活のさまざまな場面において，自身の子どもに対する愛情をどのように表出しているかが，子どもの集団保育場面における感情の安定性にどのように影響を及ぼす可能性があるかを明らかにすることであった。
食を通して積極的に愛情を伝えていると回答した母親の子どもは，食事場面において逸脱行動（席を離れる，大声で話をする，食事中の姿勢が悪いなど）が少ない傾向があり，食を通した愛情の伝達は，母親が食事場面を大切にする態度に繋がり，それが子どもの感情の安定化に寄与することで子どもの行動を安定化させる可能性があることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to examine how the mothers of 3 to 5 years old children express their affection for their children in various situations of daily life on the stability of emotions of children in the group childcare scene in the kindergarten.
Children of the mothers who recognized that their love is positively communicated through food tend to have fewer deviant behaviors (such as leaving seats, talking loudly, poor posture during eating, etc.) in the meal situation, Transmission of love through food is found to have the potential to stabilize the behavior of children by contributing to the attitude that mothers take care of food and meal scenes and that they contribute to the stabilization of children's emotions.

研究分野：行動科学

キーワード：愛情表出　感情安定性　男児の攻撃性　食を通した愛情伝達

１．研究開始当初の背景

近年，子育ての悩みや育児不安の昂進が子どもの虐待に繋がるケースが多く，社会的な問題となっている。そのような親からは，子どもとどのように接したらいいか分からない，子どもの気持ちをどのように受け止め，あるいは自分の愛情をどのように子どもに伝えたらいいかがわからないといった声が聞かれる。

人と人との間で行われるさまざまな身体接触行動のうち，相手の身体を「抱きしめる」という行為は，相手に対する積極的な受容を表す行動である(Morris, 1979)。それは親子関係においては，親子相互の心理的な絆を強める鍵となる行動であり，特に発達の初期において，親と子が，互いの間にアタッチメントを形成していく基礎となる重要な行動である。子どもはアタッチメントの対象から強く抱きしめられることにより愛されているという安心感を抱き，その心的安定性は，アタッチメントの対象が安全基地として機能する重要な契機ともなる。親との間に良好なアタッチメントを形成した子どもは，自己肯定感が強く，これがさらには自己効力感となって，例えば集団保育場面における他児との良好な関係形成に寄与するといわれている。その一方で，親の側も抱きしめた子どもが感じる安心感を直接に自らの身体を通して実感することで，子どもに対するアタッチメントを確固としたものにすることができ，ひいてはそれが，育児不安や育児ストレスの軽減に繋がる。しかし，申請者の先行研究(今川他，2009)において，『自分の愛情を伝えるつもりで子どもを抱きしめて欲しい』と依頼した父親の１人は，「自分はそのようなことをしたことがない。自分と子どもはそのような関係ではない。」と回答し，また別のある父親も，「子どもへの抱きしめがうまくできなかった。」と回答した。他方，母親の中にも，子どもに対して積極的に身体的に関わることを躊躇するものが認められた。このような親から，愛情を身体的に直接に受け止めることができずに発達していく子どもが，集団保育場面においてどのような社会的スキルを発揮するのかについては，未だ詳細なデータが得られていない。また，子どもに積極的に関わることができないそのような親に対して，どのような助言や援助ができるのかに関しても，十分な資料の蓄積がない現在，明確な指針が得られているとは言い難い。

２．研究の目的

本研究の目的の第一は，抱きしめを含む親のどのような対児行動が，親が本質的に持っている子どもへの愛情を子どもに伝えるために使われているのかを明らかにすることである。そのためにはまず，幼稚園や保育園に通園する子どもの父親と母親に協力を依頼し，日常的な子どもとの身体接触を含む愛情表出行動の実態をアンケート調査する。そこで得られたデータを詳細に分析することにより，親が子に対して愛情を表現する行動のレパートリーと，その質や量を明らかにする。

第二に，それらの愛情表出行動によって，親の子への愛情がどのように子どもに認知されているかを，子どもの集団保育場面における対人行動を測定することによって明らかにする。 親が積極的に愛情を伝えられている子どもとそうではない子どもの，感情表出行動や感情的耐性(emotional tolerability)と，対人行動を中心とした社会的なスキルを比較する。また，実験的な手法として，親に子どもを抱きしめるという行為を意図的に繰り返してもらうことで，子どもにどのような行動的変化が現れるかを検証する。親に抱きしめられることが，子どもにとってアタッチメントに基づいた安心感をもたらすものであるならば，親に繰り返し抱きしめられることで，子どもの感情表出行動や対人行動に変化が現れる可能性が指摘できるからである。それは例えば，笑顔などの肯定的感情表出行動の増加や，否定的表出行動(例えば泣き)の減少，あるいは他児に対する思いやり行動や，近接，身体接触行動などの共感性に基づいた向社会的行動の増加として現れるかもしれない。

この試みは同時に，親の側にも子どもに対する行動的，あるいは情緒的変化を惹起する可能性がある。本研究の第三の目的は，上記のような実験手続きによって子どもと積極的に関わりを持つように指示することが，親の対児感情を肯定的に変化させるのかを検証することである。

本研究は，幼児を持つ親の対児感情や，幼児に対する身体接触や抱きしめを始めとした愛情表出行動を詳細に分析し，親の愛情表出のあり方が，アタッチメントに基づく子どもの社会的場面における感情安定性にどのように寄与するかを検証することを主たる目的とする。

３．研究の方法

本研究の遂行の道筋をより有意義なものにするための予備的研究として，国内外の文献の検討を実施した。

幼稚園，保育園児の保護者に研究協力を依頼し，保護者の対児感情の測定，子どもに対する愛情表現の行動学的研究の実施，園児の園生活における感情表出行動や対人行動の測定と変化の検証，さらに親に依頼しての愛情表現の実験的な行動表出と，その結果とし

ての親の対児感情の変化の測定を行った。

さらには，子どもに対する食を通じた愛情表出（伝達）について調査するため，保護者（母親）に家庭での食育や，幼稚園に持参させる弁当作りにおける意識に関するアンケートを実施した。また，子どもの弁当の写真を撮影して内容分析等を行い，アンケート内容との照合を行った。また，給食場面における子どもの行動の安定性を観察し分析することにより，保護者の食を通じた愛情伝達が，子どもの行動の安定性に関連するかを考察した。

４．研究成果

国内外における親子の愛情交換に関する行動学的研究の文献検討を実施した結果，親の保育・教育方針等に関わる先行研究は散見されるものの，親子間の愛情交換に関する行動科学的研究はほとんど行われていなかった。

研究協力園において，家庭における家族成員間コミュニケーションの量・質と，幼稚園の集団保育場面における男児の攻撃性を中心とした社会的行動との間に関連があるかを検証した。その結果，保護者と子どもの間のコミュニケーションが豊富である家庭の男児は他児との親和的関わりが多い一方で，他児に対する身体的な攻撃行動が少ないことが明らかとなった。他方，親子間のコミュニケーションが少ない家庭の男児に，他児に対する身体的な攻撃行動が多く認められ，親子間のコミュニケーションを通じた情愛的な交流の多さが，幼児の感情の安定性に関連している可能性が示唆された。

また，幼児の年齢や性別によって，保護者のほめる程度やほめ方に違いがあることも明らかとなり，「抱きしめる」などの身体接触を伴うほめを多く示す一方で，５歳児の保護者には身体接触が少なく，「拍手する」などの身体接触を伴わないほめを多く使うことも明らかとなった。

親の子どもに対する愛情表出に関わる意識と行動との関連を調べるため，食を通した愛情の現れ方を検証した。研究協力園２園を対象に，幼児の食事場面における行動を観察するとともに，母親の食意識に関する質問紙調査を行った。その結果，母親の中には，食を通して自らの子どもへの想い（愛情）を伝えていると意識できているものがいる一方で，食を通した愛情伝達を全く意識できていないものもいた。しかし，アンケートの実施を通して，食事をともにすることや，子どもの好きな食事を準備したり，逆に子どもが苦手なものを食べられるようにすることによっても，自己の愛情を伝えることに繋がることに気付いた母親もいた。

子どもの誕生日に，誕生ケーキを毎年焼く母親は 10 人しかいなかったが，毎年子どもの好きなおかずなどを作っている母親は 48 人（54.5%），家族にとって特別な食事を毎年作っている母親も 30 人（34.1%）いた。子どもに愛情を伝えるために普段よくしている行動として，最も多かったのは「抱きしめる（79 人）」であり，「言葉で伝える（68 人）」，「手をつなぐ（55 人）」，「身体に触れる・なでる（55 人）」などがこれに続いた。食に関する行動としては，「美味しいものを作って食べさせる」と回答した母親が 34 人（38.6%），「一緒に食事をする」と回答した母親が 25 人（28.4%）であった。また，食べ物や食べることを通して，子どもへの愛情を伝えているかという問いに対し，「積極的に伝えている」と回答した母親が 16 人（18.2%），「伝えている」と回答した母親が 50 人（56.8%）おり，「意識したことがない」と答えた母親は 22 人（25.0%）だけであった。

食を通して積極的に愛情を伝えていると回答した母親の子どもは，食事場面において逸脱行動（席を離れる，大声で話をする，食事中の姿勢が悪いなど）
が少ない傾向があり，食を通した愛情の伝達は，母親が食事場面を大切にする態度に繋がり，それが子どもの感情の安定化に寄与することで，子どもの行動を安定化させる可能性があることが明らかとなった。

食による愛情表出は，子どもを抱きしめることや言葉で直接に愛情を伝えることと比較すると，保護者自身に意識されにくい傾向があるといえるが，それを意識できるようになると，毎日の食事作りや弁当作りなどを通して親と子の繋がりを再認識することに繋がることが明らかとなった。

残念ながら，園側を含め諸般の事情により，当初予定していた「抱きしめ実験」は実現できなかった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

1. 久原友貴・関口道彦・堀奈美・清水則雄・塩路恒生・<u>今川真治</u>・菅村亨，保育におけるデータベース活用の可能性−附属幼稚園の実践・研究成果を地域で活用するモデルの構築を目指して−，広島大学学部・附属学校共同研究機構共同研究紀要，45 巻，査読無，2017，印刷中

2. <u>今川真治</u>・平田道憲，父親の育児時間の 40 年間の変化，広島大学大学院教育学研究科紀要第二部，65 巻，査読無，2017，

pp.241-248

〔学会発表〕（計３件）

1．今川真治・朝原頌子，子どもへの愛情伝達手段としての食を考える，第 63 回（一社）日本家政学会中国・四国支部研究発表会，2016 年 10 月 2 日，愛媛大学

2．朝原頌子・今川真治，幼稚園と保育所における園児の食事行動の分析，第 63 回（一社）日本家政学会中国・四国支部研究発表会，2016 年 10 月 2 日，愛媛大学

3. Masae Shouho, Shinji Imakawa, Michinori Hirata, Makiko Yaegashi, Naomi Tamaru, Practice and evaluation of the father-child camping program for the reduction of childcare anxiety among mothers, XXIII IFHE World Congress 2016, 3rd August 2016, Daejon, Korea

６．研究組織

(1)研究代表者

今川　真治　（IMAKAWA SHINJI）
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：００２１１７５６

(2)研究分担者

権田　あずさ（GONDA AZUSA）
広島大学・大学院教育学研究科・助教
研究者番号：４０７１０８５１
（平成 27 年度のみ研究分担者）